

---

# エルおばぁちゃん達

枯葉花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エルおばあちゃん達

### 【Nコード】

N9646Y

### 【作者名】

枯葉花

### 【あらすじ】

仲良し（？）四兄弟は、英雄とたたわれるエルおばあちゃんのこと、気になって気になって・・・。  
そんなエルおばあちゃんの過去のお話。

## プロローグ

「おねえちゃん！！大発見だよ！！」

おねえちゃんと呼ばれた、ウールは顔をしかめた。弟であるナイロンが『大発見』と言うのは、たいてい悪いことなのだ。

「何？ロン？あら、けど私。おかあさんに、暇だったらお手伝いしてねと言われてたんだわ。暇じゃないけど、親孝行しましょうつと」

「  
ナイロンは、姉にかわされたことに気づくと、真っ赤な目で睨んで、叫んだ。

「ほんとに大発見なんだよつ！！おねえちゃんが知りたがってた、ポリエステルおばあちゃんの事なんだよ！！」

ポリエステルと聞いて、ウールは目を輝かせてまくしたてた。彼女は喋るのが好きなのだ。

「ほんとに。ホントに？ポリエステル？エルおばあちゃん？あの？ホントにホントなのね。ロン。嘘だったら、承知しないわよ？え、けど。おじいちゃんが全然見してくれないじゃない。なのに何を見つけたっていうの。ロン。ああ！！ロン。早く見せてロン！！」

狙い通りポリエステルに過剰反応した姉を見て、ロンはにっこり笑うとからかってみた。

「ああ。残念！！けどおねえちゃんは親孝行するんだ！！」

ウールは墓穴を掘って、弟に傷つけられている自分の自尊心より、エルおばあちゃんのことを気になったので、先を促した。

「早く出して。」

「・・・持っていないだよ。おねえちゃん。今から取りに行くの。」  
それを聞いたウールは、やっぱりデマだったのかと、傷ついた自尊心の方を心配した。

「僕、聞いたんだ。おじいちゃんがね、ベラおばさんが来た時。必死に『なあ。くれんかのお？ライフコンピューター。いいじゃろ？

何でそう隠すのじゃあ……。』って言ってたの。エルおあばあちゃん、ライフコンピューターを付けてたんだよ!!」

「嘘!!あの時代はまだ世に広まってなかったはずよ?」

ナイロンは一生懸命、無い知恵を働かして姉に説明した。

「だから、ライフコンピューターを作ったのは・・・力、力、ええいつ!!ひいおじいちゃんだったろ?」

そのセリフだけで、弟が何を言いたいか分かったウールは、すぐに外着に着替えると、クズグズしているナイロンに向かって、早口で命じた。

「ロン。ウレを呼ぶのよ!!後、チビちゃんも。ウレに連れてこさせなさい!!」

慌てたロンは、一目散にウレの部屋に飛び込むと、さっき聞いたことを、そのまま言った。

「ウレを呼ぶ。あ、今やってる。後、チビちゃんもウレに連れてこさせなさい!!だって。ウレタン兄ちゃん。」

「はあ?お前は何が言いたいんだ。あのチビを俺が連れてってやれって?どこに。」

「だ、だから。ほら。ベラおばさん家。」

と、言うことで、全員揃ったベラおばさん家では、ベラおばさんとの交渉が始まっていた。

「う、うん……。け、けど……。エ、エルちゃんは……。誰にも・・・み、見せるなつてエ……。」

すると、今まで不機嫌だったウレ・・・ポリウレタンが、サツと前に出てきて、はにかみながら説得にかかった。

「ええ。ベラおばさんは何も知らない。だから、いまから言うことにして頂けますか?」

「う、うん。エ、エルちゃんの孫とは思えないわ……。い、いいわよ……。どうしたらイイの?」

ベラおばさんは、年とは思えない美しさで聞き返してきた。だが、

ポリウレタンはその美貌になれてたし、自分自身も、美形なことを知っていたので、大して気にせず話を進めた。

「勝手にエルの孫が来て、自分はダメだといったのに、ウールが『借りるだけですから』と言い張り、さっさと盗んでいった。と。言えばいいんですよ。ベラおばさん。」

ベラ・・・イザベラは、分かったという様に頷いて、ライフコンピユーターを渡した。

自分が言われたことに、疑問を持ったが自分が見たいといったので、しょうがないと兄を見つめると、当の兄は、小声で『バーカ。反論しろよ。全部てめえの責任だぜ?』と言ってらアイコン（略してみた。）を持って去って行った。ロンは、姉の騙されやすい性格を笑うと、兄を追いかけて行った。

『この子は、私とアージュ・・・いえ、キュブラの間に生まれた愛娘。』ライフコンピユーターはそんな始まりだった。『この子の名前は、ポリエステルにしようかと思うの・・・だって、基本でしょう? 素材の中の。』こののろけ話を黙って聞いている、ポリウレタンではない。

「おい。こんなのどうでもいいだろ? さっさと、問題の12歳へ飛ばそうぜ。」

「わ、分かってるわよ!! そんなの!!」

『ノメリコミタイプ二ヘンカイタシマス』

・・・ポリウレタンを除く3人がのめりこんでいった。

「また・・・。おいてかれちまったなア。」

。後に残ったのは、ポリウレタンの悲しみに満ちた声のみだった・・・。

## プロローグ（後書き）

ちなみに、ポリウレタンは美形です。

## 厄日改め祭日

彼女、ポリエステルは人の気配に目を覚ました。

「なんでいかねんだよ！！エル。」

いきなり飛んできた怒涛が誰のものか分かるのに数分かつたえるは、寝ぼけナマコで聞き返した。

「はぁ・・・？何言ってるの。レーザー？」

言いながら、四方八方にはねた艶やかな黒髪をなでつける。仕草だけは色っぽいのだが、可愛い・・・というか、子供っぽい羊のバジャマが台無しにしている。

「おまつ・・・！！今日何の日か分かってんのか？」

エルは目の前に迫ってくるツンツンとした金髪を避けながら考える。ちなみに、レーザー・・・ウレイザアは茶色っ気のかかった金髪が、上にとがっていることを利用した攻撃を得意とする。

「あ、今日はカルトドウヴーか。」

やっと思いつ出したエルの目は、もう完全に起きた真っ赤に燃える目になっていた。

その眼を見て、少なからず怯えたレーザーは曖昧に苦笑いした。カルトドウヴーとは、元日とか、日の始まりなどの意味がある。銀河警察独自の言葉だ。

「ともかく行くぞ。エル。」

その言葉に、エルの表情が崩れる。苦々しげな顔で、皮肉る。

「レーザー。4年前に呼ばれちゃったおまえには、2年間呼ばれてない私の気持ちは分からないだろうね。」

「何碍んだよ。2年間呼ばれないぐらい、世間一般範囲だぞ。」

エルは悲しそうに笑うと、立ち上がった。

「分かった・・・行くよ。行くから、レディーの着替えまで覗くつもりかぁい？」

途端に真っ赤になるレーザー。そして、さっさと退散する。

「お待たせえー！！ベールッ！！」

ベールッとふざけたように呼ばれたイザベラは、超絶美麗な顔をほころばせる。

「エ、エルちゃん……。き、来てくれたんだ。よ、良かった。」

艶やかな金髪は、可愛らしくウエーブしてレーザーを魅了する。そんな様子を一人微笑んでみている男　スタディが、ゆっくりと口を開く。

「そろそろ入らないとヤバイよ。みんな。始っちゃうよ。」

その声には3人は慌てて講堂に入る。

「では、今から銀河警察員発表会を行うっ！！」

レイウツド第一軍隊体長は高らかに叫んだ。彼の茶色っ気のかかった金髪がふんわりと定位置に収まると同時に、歓声が上がった。何しろみんなが入りたがってる銀河警察なのだ。

銀河警察とは、銀河系から次々に送られてくる被害届などをもとに銀河の平和を守る警察組織だ。1軍から10軍までにわかれている銀河警察は、組織長（イザベラのお父さん）によってまとめ上げられており、新入りは1軍に入れられるのが通例だ。魔法を使った警護は、なんと隊員一人一人が『殺傷許可証』なんて言う物騒なものを持つてるほどだ。

「名前を呼ばれたものは、速やかに立ち上がりステージへ順に並びたまえ。」

その言葉に回りの雰囲気引き締まる。

「まず、今年は推薦入隊があるぞ。ホーム・ポリエステル。」

推薦入隊とは、組織長（ベラのお父さん）が、条件を満たしていないものなどを、ムリに入れることだ。

さて、ちなみに呼ばれたホーム・ポリエステル……。エルは、物思いにふけていた。

これって、なんで条件なんてあるんだろ。生涯試験10級なん



て、40歳まで私ムリだと思うなア。ソーヤー推薦入隊でさ、レイウッド隊長もそうなんだよね。てか、噂ではあの女顔にファントム組織長が惚れたんじゃないか、って話もあるよねえ。じゃ、ベラのお父さんてホモ？・・・無いな。確かにレイウッド隊長は、ベラと互角の超絶美麗だけどさ、そんなのに惑わされないと思うんだよねエ。なんつったて、ベラに似たあの美しさ！！ホント、ミュージック家はいいよねエ。や。けどホントレイウッド隊長、美しいよね。なんで男に生まれちゃったんだろ。あの女顔は、見るものを射抜いちやうよお。腰まで降りる長い髪も、そのうえオールバックした前髪も、美しいんだよなア。男に妬いても仕方がないけど、妬いちやうよねえ？

もう、何の話か分からなくなってきたとき、そのレイウッド隊長の怒涛が飛んだ。

「おい！！ホームポリエステルはいないのか！！」

「はい！！おります！！スイマセンした！！先生！！」

エルが、自分が呼ばれたことに気づいて、いつも居眠りして怒られてる時を思い出して・・・先生つか言っちゃった。なんて、どうでもいいんだが。とりあえず、美しい顔をしかめてレイウッド隊長はエルに静かに怒った。つもりだが、ほかの人には皮肉ったようにしか聞こえなかったりした。

「速やかに、ステージに上りたまえ。誰が先生だって？まったく。

俺は隊長だ。覚えとけ。」

笑いが起こる。エルは、真っ赤になりながらステージに上がった。エルは茫然としていた。いや、恥ずかしくもあつたのだが。推薦なんて、エリート中のエリートの証じゃないか。だって、過去推薦入隊したレイウッド隊長は、今第2位の地位だぞ。シーザー第2軍隊長だって、推薦入隊だし・・・。

「夕食よく降りてきなさい。」

一人だけのめり込めず、ただ見るモードにしていたウレは母親の声

に、にやついた。

そして呆けたように画面を凝視している兄弟を見ると外用の声音で話しかけた。

「ごめんね、僕。入り込めないんだ。だから君たちの分まで、夕飯食べてあげるね。」

町の女の子をたぶらかす、甘い声で呟いたウレはその日、ハンバーグを4人分食べたとき。

## 厄日改め祭日（後書き）

ただ、ただエルはバカなんですよ？別に。変な思惑なんてありませんから。

ちなみに、ウレ君は、めっちゃカッコいいです。レイウッド隊長に勝ります。や、レイウッド君は、可愛いからなんですけど。とりあえず、次行きまひよか。

隊長様は頭の悪い生徒に優しく教え続けた。

「・・・以下。おい、エル分かってねえだろう？」

「ええ！！レイウッド隊長っ！！まさかテレパシーまで使えるようになったちゃったんですかつ。」

レイウッドの美しい女顔は、極限まで歪んだ。そりゃあ。分かるだろ。窓の外を一心不乱に眺めてたら誰だって。そんな思いを隠して、もう一度エルのためだけにかみ砕いた説明をする。

「あのな。吸血鬼という、生物が、今回の、獲物だ。ここまでは分かるだろ？」

「あの。吸血鬼ってなんですか？」

レイウッド含め、第一群の者は肩を落とした。その中には、レーサーなどの仲良し組もいるのだから、エルの見方などいるはずもない。

「あのな、吸血鬼というのはだな。人の、血を、通じて、生命エネルギーを、取ることによって、生きながらえている、動物だ。」

噛み砕く口調に、幼稚園を想像した者は少くない。エルは真剣に頷くが、レイウッドはハカセに対して『後で、マジに教えとけ。敗因がコイツになるとか最低だから。』と囁くほどの知識しか渡していない。

「いいか？次、行くぞ。で、名前は、エドワード。エドワードだ。分かったか？」

「えどーうど。ですね。はい！！メモしましたっ！！」

「するな。エドワードだっ！！誰がえどーうどなんて怪奇な名前をあげると言った！！」

誰もが、やな役を押し付けられた青年レイウッドの身を案じながらも、ドアの方へ体を動かす。

「あ、エドワーズでしたか。済みません。きっと略称はエドでしょうね。」

「もついい。エドワードだなんて言ってもわからんだろう。そうだ

な。エドワードでも、エドワーズでも略称はエドだもんな……。」「  
見かねたハカセが、応戦しようと身を乗り出した。

「ちなみにエドワードの略称は、エディですけど、関係ありません。  
話の本題は名前ではありませんから。それに、レイウッド隊長。関係  
ない我々は、帰ってよろしいでしょうか。」

応戦なのか、レイウッドを追い詰めているのか、どっちともとれる  
ような話を切り出すと、ハカセは周りの隊員とともに、去ろうとし  
た。質問は、形式なものだからだ。と、思っていたのだが。

「ああ。帰っていいぞ。オメエら。だが、ハカセとレーサーは残り  
やがれ。応戦しろこのバカのために。」

ほかの隊員たちは、飛ぶように帰って行った。しかし、ベラは帰り  
損ねていた。それを見かねたかのように、レイウッドが声をかける。  
「ごめんな、イザベラ。あの約束はまた今度にしてくれないか？明  
後日とか。どうだ？」

「あ、あさつて……。なら空いてます……。すみません。では……。  
ま、また。」

しどろもどろになりながら帰ってゆくベラが面白いのか、レイウッ  
ドは少し笑うと本題を切り出した。……。もちろん、二人の関係に  
ついての揶揄は眼力で治めたのだ。

「この、エド……。エディは、悔しくも、王家なんだ、細かく言う  
と、王子、なんだ。で、この人には、捕まえて、いいか？と、言う  
許可が、必要なんだ、ここまでは、分かるだろ？いや、分かるな。  
次行くぞ。」

質問をしようとしたエルを、レーサーが力ずくで抑える。そこに、  
ハカセが加担する。

「だから今度。王家に王様の許可をもらいに行くんだよ。エル。」

「なんで、バカ一人捕まえんのに、王家の許可がいるんですか？」

エルはレーサーをよけながら、必死に尋ねる。だけど、レイウッド  
は軽く無視して次に進めた。

「許可が取れたら、エド……。エディを、探し出して、捕まえるん

だ。了解？」

「ええ！！場所分かってないんですかあ。」

甘ったれた口調にレイウッドが、軽く眉をひそめた。

「なんなら、お前に探す権利をやってもいいぞ。被害届が出てから4日・・・これでどの惑星にいるかもわからないヤロー相手に。」

「でも、せめてどの惑星かぐらいは分かれますよねエ。4日なら。それに、エドと隊長はお友達じゃないんですかあ？」

イラついたためか粗い口調になったレイウッドを、逆なでするようにエル言葉は無遠慮に発される。

「それをどこで聞いた。ハリー・ポリエステル。場合によっては吊るす。答えよ。」

「ちょ、こわっ！！ベラ！！ベラだよ。あ、ベラですよ！！なんかエルちゃんだけに教えるけど・・・とか、言ってたような気がしますね。自分的には、そんなので私の口が封じられるわけもないことを知っての確信犯だろうと心得てますが。」

急に饒舌になったエルは、自分を庇うよりいつも完璧優等生として名をはばからせている、ベラを攻撃することが楽しくなったのか、調子に乗って喋り始めた。

「何か、すんごい話の合う仲だったとか聞いてますよ。私一人で抱えるのは重すぎて・・・なーんてほざいてましたよ。アイツは。」  
かなりレイウッドの傷をえぐったようだ　とエル以外の2人は察して顔を青くした。何せ、そのイザベラとの約束を蹴ってまで、教えてやるうとしたのだぞ？あのベラを！！蹴って！こんなバカのために！！そして、そのバカに蹴った相手を馬鹿にされている・・・最悪だ。なんてことは、エルじゃなかったら誰でも分かることだ。しかも、本当に仲が良いならレイウッドは今回の逮捕を、喜んでやっではないだろう。そこを突くなんて。そんな空気を読んだのか、エルはさっさと帰ろうとした。

「あ。分かりました。今回の件は分からないたびに、ハカセに聞きますから。これで。」

「吊るし決定。屋上に行け。レーザーコイツをおさえろ。ハカセ縄は納戸にある。取ってきてくれ。」

レイウツドか。確か七宝・レイウツドだったか。ミュージック家の親戚、いや側近だったはずだ。

しかも、このころは第一隊長らしいが今ではトップクラスの狩人になっており、74歳とは思えない手腕でメツチャ元氣だとか聞いた。別名『天のギロチン』。殺す時、無駄無く首を刎ねるからだそう。美しいと思ったことを覚えている。俺が、この世で美しいと思っっているのはあのひと、クレスだけだ。

あの人を見て、なんで『みんなは俺を世界で一番きれいだ』とかいうんだ？この人の前ではいらない自信がたっただけじゃないか。と悲觀的になったのを覚えている。老いても美しかったレイウツドさんは、スクリーンの中で光り輝いていた。

「あいつら昨日もだったけど、今日も夕飯抜く気か？厳しいダイエットだなア。」

「ねえ、ポー君。ウルたちどうしたの？ホントにダイエット？」

「お母さん。ポー君と呼ぶのはやめてくれないかな？」

ポー君・・・失礼、ウレは微笑みながら答えた。答えにはなっていないが。

「ウル達は、まだ二階にいるの？いいえ。ウルはいいわ。リルだけでも一緒に食べたいんだけど。ママ、悲しいわ。」

「お母さん。今日僕は出かけなくちゃいけないんだ。チビちゃんを読んだら解放してくれる？」

「ママって呼んでくれるなら解放するけど。」

ウレは頭を抱えた。この馬鹿っぷりは、おばあちゃん譲りだったのか・・・。

「ママ。解放してくれるかい？」

「心がこもってないわ。ああ。今日はずっとこの家にいてくれるの

ね。ママは嬉しいわ。ポリー。」

心の中で『呼び名を統一してくれ！』と叫びながら、いろんな女を虜にしてきた笑みを浮かべて、粘り強く交渉した。

「ママ。好きだよ。今日家を抜けることを許してくれない？」

そんなウレを見ながらお父さんは、これでいいのか？と思っていたのであった。



隊長様は頭の悪い生徒に優しく教え続けた。（後書き）

そうなんです。この家のパピーは無口なんです。あ、パパです。パパ。そして、エルはバカなんです。後で思い知りますよ。

エルの馬鹿っぷりが気になっても気にならなくても続きをどうぞ。

## ドラキュラ城に遠足だ

「今日から一か月間、よろしくお願いします。ガイドを務めます、ライと申します。」

ライは、片方だけ羽の生えた頭を、深々と下げた。そして、みんなの疑問の視線から必死に耐えた。何しろ、ライはまだ1、2歳の子供の様に見えたからだ。ただし、実際のところ彼女は17歳で会って、1、2歳など侮辱するにも程があるというものである。しかし吸血鬼という者は悲しい生き物で、なかなか老けない。そのせいで17歳の若く麗らかな彼女は、1、2歳に見えるという屈辱に戦っているのだ。

「レイウッド隊長様！！銀河警察は、ガイドを雇う金がそんなにも無いのですか！？」

「ふん。自分のみぐらい自分で守りたまえ、ジャック君。」

思いつきり皮肉で返したレイウッドだが、この小娘だと道案内も出来ないのではないかと、本気で頭を抱えていた。だって歩くのも不安定なのだ！！どうして安心できよう？

何よりも、ライはちゃんとした吸血鬼じゃないのだ。混血の吸血鬼。人間と吸血鬼の間にできた、忌子なのである。その為か、右半分に影響が出ている。右目は何があつたのか眼帯が巻かれ、頭に生えているはずの羽は左のみだ。牙も左のみ。

「五月蠅い！！進むぞ！！」

それから約9日間かけてドラキュラ城に向かって歩いた。（この間ウレは早送りをしていた。）

そして、10日目。彼らは無事に中間地点『寿園』についた。寿園は、いつもは修学旅行生を泊めている人間用の施設だ。今まで野宿寸前だったエルたちにとってはまるで天国だった。

そして夜（ウレは早送りをした）。

エルは猛烈な渴きと共に目が覚めた。何しろ、出て来る物出てくる物、すべて赤っぱかったので、怖くて水分が取れなかったのだ。エルは周りの人を起こさないようにそろりと起き上がって、部屋から出て行つた。自動販売機求めて。あれならさすがに水ぐらいあるだろう。

「ポリ・テル・・・あると・・・無いのです!!」

話し声が聞こえてきて、エルは不思議に思つた。なんたつて、今は夜中。エルが起きているのはまだとして、喋るほどの時間ではない。好奇心旺盛なエルは、話を聞こうと壁に耳を寄せた。

「フフフ。あなたは外見しか見てないのよ。確かに、あの子は力がないように見えるわ。でもね、青になつたあの子はすごいよ。笑えるわ。すごい変わり方をするんだから。」

「私は外見で判断なんかしません!! キチンと、論理に導いた考え方をしていますっ!!」

「じゃあ、そんなにキンキン叫ばないで、笑えるものも笑えなくなつてしまつわ。」

「お願いします。見捨てないでくださいっ!! あなたしか、頼める人いないんです。」

「ふん、見捨てたりしないわ。フフフ。面白い。あなたの血筋をわざわざ見捨てるほど私はバカじゃないわ。ヴァンパイアの混血ちゃん。」

エルは息をのんだ。片方の声の主が分かつたのだ。この鈴を転がしたような美しい声。エルは一人しか知らなかった。ベラ。ミュージック・イザベラその人ではないか。しかも、赤バージョン。

ベラは厄介な性格だつた。二重人格、一人の人に二つ以上の性格が一緒くたになつて表れてしまう性格。

厄介な事この上ない。ベラは、耳にかかっている愛らしいメガネをはずすと、目が真っ赤に（まるでエルだ）になつてしまい、どこまでも『笑い』を求め、『喜び』を求める冷酷人間になつてしまふの

だ！！（え？前後のつながりが見えない？知るか、本当の事なんだもん。）さて、ここでエルの好奇心はもつと掻き立てられた。ベラと話しているのは誰なんだろう？そう思い、勇気を出して小窓から覗いてみた。（エルは小窓の近くで聞いていた）

ベラはやはり赤だった。問題はそこではない。ベラの話し相手は、15歳くらいの少女だった。いくらエルが鈍くてもわかった。ライだ、と。もちろん身長は違う。年も違う。顔つきは微妙なところだ。でも、吸血鬼の混血なんて、ライしか知らない。少なくとも、ここにはライしかない。さつき見てた人と同じ人とは思えないぐらい、神の色が変わっていた。腰まで伸びる黒のかかった茶色の髪。眼帯で隠していた右目は、美しく光っている。（ヴァンパイアの目は光を吸い込み、反射しない）牙も、心なしか引っ込んでいる気がするけど、服は同じだ。大きさが違うが。

「さて、今何時だと思っているの？早く寝ましょ、あなたと違って私は昼型なのよ・・・。眠かったら、笑う気力もなくなるわ。」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバ男ヤバ沢ヤバ子じゃんか！！

出て来るっ！！エルはそう思い、脱兎のごとく逃げ出した。自動販売機の方へ。幸いにもベラにも見つからず、自動販売機にも『ミネラルウォーター』らしきものがあつた。

何回も、何回もベラに聞こうとした。さりげなく『昨日の夜、どこ行つてたの？』って聞いてみようとか口を開きかけたが『ライと話してたの』と、答えられるのが怖くて・・・。

ベラには、友達がいなかった。その綺麗な顔立ちにの横に並んだら見劣ってしまうからだと思う。私にも友達がいなかった。ここ、銀河警察（神の家）では、神の色は茶色が通流で、黒なんてありえないつつつか、前例が無い状態なのだ。それで、怖がられ人格を無視した、外見だけの拒否を2人ともうけていた。ベラは私の唯一無二の存在。たった一人の親友。幼い独占欲だろうが、私はベラに友達

ができるのが嫌だった。私に向かってだけ笑ってほしかった。2人の時は少し滑らかになる話し方も、すべて大好きだった。赤の時も怖くはあるけど、好きだった。信念のある感じに憧れもしたものだ。

ヴァンパイア城についた時、ライは赤いスカーフを付けていた。礼儀正しく別れを告げた。

「今日限りで、ガイドを終了させていただきます。今までありがとうございました。」

けど、エルはライの声も隊長の声も聞いてはいなかった。赤いスカーフ。あれは『サーベルの破』。ベラとお揃いだ。ベラと！！あれは、ベラがお父さんから3歳の誕生日にもらったもので、家庭科を滅亡の危機に突き落とす、危険なものだった。あれは世の中に50個程度しかなく、ほとんどベラのお父さんが所有していた。使い方は、自由。頭の中で思い浮かべたものが、若干の魔力と引き換えに真野が出て来る便利なものだ。しかし、それを生業としている家庭科からすれば、面白くないのは必然だ。ベラにおふざけで言ってみたことがある。『それ、可愛いなア。頂戴よオ。ベラ。』けど、ベラは真剣な表情で返した。『お、大人になったら・・・ぜ、絶対あげるわ。』と答えられた。それを、ライは首につけている。ベラは胸元でリボン結びをしている。

ベラは歩みだしていた。ヴァンパイア城に。足を踏み入れていた。もう、守る必要はない。前みたいに、『エルちゃん。ここ、怖いよ。』とすがりついてくれない。

エルは、誰も守るでもなく、誰に守られるわけでもなく、一人で足を踏み出した。

彼女自身も、一人で歩もうとしたのだ。すがっていたのは彼女だったのかもしれない。

「ポー君。お願い。今日は、外出許可するから。」

「ママ。僕は今日、外出したくないんだけど。」

「明日の分。許可するから。ウル達を呼んで頂戴。」

「行きます。ママ。もちろん。」

ウルは意気揚々と立ち上がると二階へ上がって行った。

## ドラキュラ城に遠足だ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。たぶん、次はオマケになります。

## オマケ

ウレの手が私の肩に触れた。カッと体温が上がる。ずっと触れたいと思ってた。触れられたいと思ってた。ウレの手が私に触れている……。嬉しいけど、嫌だ。なんでだろう？ウレの冷たい目が私を射るように見つめる。

「早く、降りてくれないかな？お母さんの非難が痛いんだけど。」

「ウ……。ウレが止めてくれないと、抜け出せないの知ってて言うてるの？」

「当たり前じゃん。けど、愛らしい妹に3日も夕食を抜かさせるのは忍びないからね。」

そつだ。私は今になって空腹に気付いた。だいたい『愛らしい妹』って……。恥ずかしいセリフをさらつと吐くんだから。好きなんだ。ウレは私にないものをいっぱい持っている。

「ウレ兄ちゃん！！今日の晩御飯、何？」

ロンが無邪気に聞いている。

ああ。そつだ。ウレも昔はこんな子だった。妹の私から見ても、素直で優しいお兄ちゃんだった。だけど、それは兄が4歳の時に幕を下ろした。燃え盛る赤い目から光が消え、優しさが消え、冷やかかな鋭い目になっていた。自分がすべてを知らないと安心できない。そんな人に様変わりした。

一度、ウレに対して詰ったことがある。『そんなにも、何もかも知らないと気がすまなのか！！そんなに、優位に立ちたいのかっ！！』ウレは静かに答えた。『お前に、この辛さが分かってたまるか……。そつだよ。俺は優位に、頂点に立ちたいんだ。』こんな人、知らない。私の第6感危険を知らせた。

私の愛した兄は、もういない。変わってしまったのだ。



けど、好きだ。私は自分の気持ちに震えが走った。まだ好きだった。前より好きだった。

だって彼を変えたのは、この私。

私だもの……。

ひいお爺ちゃんの、お葬式の次の日だった。あれは。ひいおじいちゃん、ライフコンピューターの創生者で、この星で初めてライフコンピューターを使った人で、短く編集したライフコンピューターをお披露目することになったので、私たちは、披露宴の席に座らされた。

「ねえ。おにーちゃん。なにがはじまるのお？」

「ウル。静かに。今からね、面白いものが見れるんだよ。」

「おもしろい？ ホント？ ウル、楽しいー！！」

「黙って、画面を見るんだよ。」

ひいお爺ちゃんのライフコンピューターは、普通に面白くなかった。すると、耳につく鳴き声が聞こえた。ふっと振り向くと、泣いていたのは兄だった。

「ママーっ！！ママーっ！！ママーっ！！ママーっ！！ママーっ！！ママーっ！！うあああああああああ。うわああああん。戻ってえよお！！マあマーっ！！」

「あら。どうしたの？ ライフコンピューターが怖かったのかしら。」

私はなんでだろう、と思った。初めて兄が泣いているところを見たが、泣く理由が分からなかった。そこで、お兄ちゃんに聞いてみることにした。

「ねえ、おにーちゃん。なんでないているの？ あんなのがこわかったの。へんなおにーちゃん。」

私は、悪意などなかった。お兄ちゃんに恥をかかせるつもりなど、3歳の子にはないに決まっている。けど、悪乗りしたいところがあった。

「ホントだよ！！ポリウレタンは、ビビりだな！！ダッセ〜。」  
「気持ちわりい！！『ママア』だつてさあ。」

いとこや、はとこがそろつてポリウレタンを馬鹿にした。  
それを黙って見ている親たちでは幸い無かったので、兄は救い出された。そして、出る寸前に私のことを鋭くにらんだ。それは、今の  
ような冷ややかな目だった。

ああ。変わってしまった。変えてしまった。変わるきっかけを作ってしまった。

「おい、ウル。また、ライフコンピューターに入りこんじまったのか？」

「ウレ……。入り込まないタイプは、面白い？」

「なんだ？嫌味か？それは。後にしてくれよ。今日は、オムライスだぞ。」

そう、後で分かった。ウレはまれにみる、入り込めない人だったのだ。それで、皆が『あんなの普通じゃん』と言っている時『あんなの』が分ならず、分からない恐怖に苛まれていたのだ。それで、彼は巷で『情報屋』名を馳せる人になってしまったのだ。情報はすべての上に立つと、情報を持っている者こそがこの世を征すると……。

私が変わってしまった。

ならば私がその罪を負い、私はこの人を好きでいつづける。

それが私の罪滅ぼしだから。

## オマケ（後書き）

ウレ君が変人なのはこんなわけがあつたのです。二人とも思いつめ  
ちやうタイプですから。次回はちゃんと本編ですから、ご安心を。

## ドラキュラ城の王様は

「悪趣味。」

「そ、そうかな・・・？す、凄い可愛いと思うけど・・・。」

エルはリボンで括られた骸骨のモデルを持ち上げながら、不満そうに言った。だが、何度もドラキュラ城に来た事のあるベラは、なんとも思わないようだ。

「本気で言ってるの！？じゃあ、この棺桶の様なベットはどう思う！？」

「ちょ、ちよつと寝づらいかな・・・？」

「ちよつとじゃないわよ！！人間のこと総無視じゃないっ！！この部屋。」

「そ、そりゃあ・・・に、人間のままここに来る人なんて、滅多にいないから・・・。」

エルは目くじらを逆立てた。寿壮での大部屋と違い、2人部屋なのは嬉しいけど、悪趣味すぎるとさっきからエルは文句たらたらなのだ。馴れているベラにとっては、五月蠅いことこの上ないのだが。

「もういやゝ。あ、そうだ。レーサー達のところに遊びに行こうよ！！」

「ごめん。私は隊長に呼ばれているから。」

「そうなんだ・・・。じゃ、暇になったら来てね。」

ベラは、エルが言った途端真顔になった。ベラは極度の人見知りなだけで、ドモリ癖は無いのであった・・・。そして、メガネをはずした。

「入ってきていいわよ。レイウッド、ケイト。」

「ご光栄だね。気配だけで察してもらえるなんて。」

ケイトは御年650才だとは思えない若々しい言葉で返した。

「イザベラ。悪いがさっさと話を進ませてもらうぞ。なにせ、お前の立場は面倒くさいからな。実質副隊長さん？」

「いいじゃない。裏番みたいで。面白いわ・・・。」

「ドラキュラの王よ。面会の許可を銀河警察1課第1体隊、隊長の名を持つて要する。」

「許可しよう。そんな、硬い表情をするなよ。レイチエル。俺とおまえの中だろう?。」

周りがざわつく。ヴァンパイアの友達がいる人なんて、珍しいのにも程がある。しかも、レイチエルだって?彼は、レイ隊長と呼ばれることさえ、嫌がるほどレイウッドという名前に誇りを持っているのだぞ!?

「いつの間にそんな仲になったんです。ケイト様。あと、何べんも言ってますが私のことはレイウッドと呼んでください。」

「つれないなア。レイチエル」。俺は悲しいぞお?。」

やはり勝手に言っていたのかと、周りは安心した。我らが隊長がヴァンパイアに食われたりでもしたら、我らの死を意味するのだから。「さっさと本題に移りますよ。エドワードの捕獲許可を下さい。」

「いいよ。けど、15日間ならね。」

「半年と考えていたのですが・・・。」

「ごめんね」。レイチエル。俺も君のためなら息子を縄にかけるのは何とも思わないんだけど。さすがに一国の王子が半年もいなかったら、政治に響くんだよねえ?。」

「それは承知の上で・・・。そもそも、あんたのこの息子が一日で500体も貪り食ったからいけねえんだろ!?。」

みんな息をのんだ。500体・・・?しかも、この王の機嫌を損なわせるようなセリフを!!隊長って奴は!!馬鹿野郎っ!!しかし王の反応は、皆が予想していたものとは大幅にずれていた。

「怒った顔も可愛いぞ。レイチエル。しかしなア。奴も、もう40歳だぞ?確か。親が食事について、シャリシャリ出る年ではあるまい。」

「350才だろーが。さらっと50年間違えるなよ。そんなこと言

つて、500体つてなると口出してもいいぞ。絶対。」

「まあまあ。ちゃんと僕から言っておくから。15日にしてん？」

「無理。さすがに短すぎ。」

「けどなあ……。難しいんだって。そろそろ俺、死にそうだし」。――

「バカ。知ってたぞ。最低でも1000年は生きるってこと。それに、せめて1ヶ月でどうだ。」

「いーよ。1ヶ月で手を打つか。」

みんなは、深いため息をついた。もともと、半年の予定でここにきて、1ヶ月で手を打つはめになるとは

……。

「隊長と、副隊長そして、隊長補佐はここに残ってもらおうか。」  
エルたち平は面会場から、追い出された。

「しかし、ひでえよなあ……。1ヶ月つて。俺たちはヨ、半年つて言ってたぜ!？」

「ねえ。少し、不平等だよな……。それに、ベラまで残されたのが、気になるな……。」

「どーせ。俺たちは、いらねえよつて。」

「あ、そーだ。二人とも聞いた?エディの場所、割り出せたんだつて。」

「全然関係ない話だな。また。エドワードがどうしたつて?」

「あのね。エディは……。チキウって星にいたらしいよ。」

「なんでその地球とやらにいたんだ?」

「何でも、文化的に劣っているから、『むぼーび』なんだつてえ……。『むぼーび』って何?」

「吸血鬼に、対抗できないってことだよ。後、無防備ね。」

聞いたくせに、2人は適当に聞き流した。

「ふう。わざとらしくったなア。レイチエル。やっぱり。」

「ケイト。勘弁してくれよオ。みんなの前では、レイウッドって呼んでくれてあれ程・・・!!」

「早く本題に入ってよ。私は、お友達おっぼり出してきたのに・・・。クスクス。」

「とりあえず、その血の詰まったタンクの意味を聞こうか？ケイト。」

「プロジェクトAだよ。これが。」

「血を大量に集めて、どうするつもり？がぶ飲みでもしたいのかしら。フフフ。」

ケイトは渋い顔をしながらうなった。そして、レイウッドの方を向いて一言。

「お前の、その清らかな唇に誓って!!コイツに真相を話していいんだな!？」

「ああ。この唇には誓わないが、イザベラに話しても支障はない。絶対ない。」

「えー。裏切ったらお前の唇を奪おうと思ってたのに？レイチェルうー。」

レイウッドは、いまにも蹴りださんばかりの表情で、断言した。

「早く言え!!お前のその行動が、遅々として進まない原因なのだっ!!」

「分かったよ。けど、怒りは皺の原因だよ？レイチェル。お前ほどの美人に皺は似合わない。」

「うざい。さっさと言うんだ。」

「はぁーい。うちの、民は血に飢えている。金がないと血を手に入れない、社会になってしまっただ。その為、共食いも少しづつだが広まりつつある。このままだったら、町が血の海になってしまうのも時間の問題だろう。それで、ある日、このタンクの中にある血を、皆にばらまこうかと思っているんだ。今も、もう配給制度はしているんだけど、僕たちにも食べる量というものがあってね。全部をあげる訳にはいかないだ。だから、血がいる。そういつてエ

ドワードを話したわけ。それだけだよ。」

「エドワードは市民のために血を集めているわけね……。フッフ。面白いわねえ。」

レイウツドは涙ながらに、話しかけた。

ブチッ

「ボタン。私と遊ぶ約束忘れたとか言わせないわよ?」

「忘れてなんかいないさ。クレス……。そんなに怒らないでくれよ。」

その美しい笑顔に一瞬くらっと来るが、クレスはまだ怒っていた。

「バカっ!!! 忘れてないなら、なんで1時間もっ……。またせつ……。うゝ。」

最後らへんは泣いてしまったクレスに、美しく語りかけるポリウレタン（呼び名を一つにしてほしい）

「ごめんね……。つい見入ってしまったて。」

それが、起爆装置だったのだ……。

「バカっ!!! エルさんに見入るなんて……。私という存在があらがらっ!!! ボタンなんて大っ嫌いっ! 今日のリールはお預けよ!」  
ボタンは、一人さびしくつぶやいた。

「エ、今日はリールなんかしないんだけど……。」



## ドラキュラ城の王様は（後書き）

初めて登場しました。ケイト様。また濃いの出しちゃったもんです。はい。レイウッドとの間には、何にもありません。前に、少し世話になったんですって。あと、クレスちゃんも初登場ですかね。可愛い子ですよ。あの子は。

## 地球

「汚いッ!!」

「ゲホッ!くせえゝよ。なにこれ?」

「排気ガスだよ。成分は主にCO<sub>2</sub>なんだ。」

「へ、へえ。で、でも、この箱は面白いね。ひ、人を運ぶ箱・・・初めて見た・・・。」

みんなは、ニッポンという国の道を歩いていた。みんなと言ってもレイウッド隊長と4人組なのだが。

そして灰色の煙(?)を盛大にあびた後のセリフなのだ。

「それにしても誰も飛んでない・・・。へんな星だ。体もチョット重いし。」

「だ、誰も飛ぶ能力を持ってないのよ・・・。レーザー。」

「重力も7・5倍なんだよね。これでチョット重いで済むなんて、さすが適応ガムだね。」

地球適応ガムというガムを嚙んできているため、ここの空気にも慣れているはずなのだが。みんないいとこ育ちなのでやはり気持ち悪い様だ。

「早くついて来いッ!!遅いんだ。お前らは。地球の事なんて座学で習ったろーが。さっさと行くぞ。」

レイウッドを含め皆さんはかなり正確に分かったエドワードの場所周辺を、くまなく探すことにしたのだが。新人ということでレイウッドがつくことになり、ふつう4人グループの所を5人グループにしてもらって行動中だ。

「イザベラ。瞬間移動使わないか?」

「え・・・。レ、レイウッドが決めて・・・?」

「・・・調子狂うな。青の時。・・・外していいか?イザベラ。」

「やつ・・・と、友達の前ではあんまり・・・。け、けど。レイウッドがして欲しいなら・・・ど、そっちでも・・・いいよ?」

レイウッドは少し顔を赤くしながらもベラのメガネをはぎ取った。  
ベラの目はレイウッドの赤い頬など目にも入っていないような感じで  
キリリと前方を見据えていた。

《コチラトウホクチホウチヨウサグループエドワードハミツカラナ  
カッタキンキチホウグループパドウダツタカ》そこまで打ってレイ  
ウッドは顔をしかめた。この通信機はこの固い文字しか打てない・  
・。しかも句読点などが打てないときた・・・。

「レイウッド。終わったかしら？フフフ。ゴウさんの事気になる？」  
「お前はそういう言い方しかできないのか。・・・気になるけど、  
近畿地方。」

「ははは。素直じゃないわねえ。」

エルはレーザーと顔を見合わせた。いつからこの2人はこんなにも  
仲良くなったのだろうか？

「あ。返信来たぞ。」

《コチラハソレラシイドウクツハツケンゼヒキュウゴヲネガイタイ  
キュウシュウチホウモチュウブチホウモヨンデクレホカノハイイカ  
ラ》

「ん？此方は其れらしい洞窟八件。是非久呉を根が痛い。急襲痴呆  
も虫部痴呆も四で繰れ。どーゆー意味？レイウッド隊長」

「エル。頼むから黙って座つていてくれ。」

そして真剣な顔をするレーザーとイザベアの二人にコシヨコシヨ  
喋り、ハカセを呼んで細かく何かを書き留め始めた。エルはきちん  
と黙って見ていた。そしてレイウッドは日付が変わる寸前に叫んだ。  
「できたーッ！！」

「何ができたんですか？レイウッド隊長。」

「もちろん、エドワードがいる場所検索を近畿地方周辺だけに絞つ  
て検索したらエドワードの居場所をみつけ出した。さて、お前は何  
も知らなくていいんだ。忘れる。今言った言葉。」

さて、ここは近畿地方の三重県の山の麓にある洞窟の・・・10メートル前である。周りにはバリアが張られ、魔力を持たない物は何も見えないようになってる。だから、銀河警察の人々には丸見えなのだが、入れないのは入れないわけだ。

「俺が行く。」

立ち上がって呟いたレイウッドは、副隊長に指揮を任して進んでいった。しかし、頼まれた方の副隊長は慄いてレイウッドを止めようとする。

「どうやって行くんですか！？バリアを壊すなら専門家がいますっ！！」

「うるさい。バリアぐらい壊せるサ。」

「無理です！！これの強度はバ力になりませんっ。」

そこで立ち上がったのはゴウ近畿地方捜査軍隊長・・・まあ、副副隊長あたりのポストに普段はいるけれども。

「俺も行くよ。レイチエルみたいな女の子に一人で行かせるなんて男が廢るよねえ。」

「うぜー。女の子じゃねえし。レイチエルじゃねーし。」

「俺はバリア破りの専門家だけどー。いいかな？副隊長。」

「いいけど・・・。ゴウ。お前専門家だったっけ？」

微笑を返したシーザーさんは、この件で副隊長に任命されたという・

・・・あとの話だが。もちろん。

「開くぞ。あ、間違えた。ひらくかも。」

「そろそろ真面目にしるゴウー！！」

二人はギャアギャア言いながらあんなに難しいと言われていたバリアを抜けていった。

みんなは目を凝らしてみていたのだがなんで開いたかさっぱり分かんなかったし興味本位で触った隊員はやけどをしたため、誰も近づかなくなった。

「さて。レイウッド隊長とゴウが行ったため私たちは、ほかの隊員を集めてこなくてはならない。と思うから。みんな、散れ

っ！」

グダグダな指令に嫌な顔をしつつ、隊員はほかの支部を呼ぶため飛び回った。のだが。残ったのはエル率いる新人組。

「あのー。副隊長さん。私たち。どーすればいいですかあ？」

「ここら辺で見張つとけ。洞窟。」

「レイウッド。どうしよう。俺ホラー系の映画駄目なんだ・・・。」  
「奇遇だな。ゴウ。俺も今そう言おうと思ってたんだ。俺はホラー系の小説が駄目ンダヨねー。」

彼らが気軽に話し合っている前には女性から男性まで成人あたりの死体が山積みになっていた。で、現実逃避が始まったというわけだ。入ってすぐ死体の・・・しかも血を完全に抜かれた死体に会うとは思っていなかったのだ。(いや、思っているわけではないが。)

「さて、これでエドワード、もしくは別の吸血鬼がいるのは確かだねえ。」

「いや、死体置きかもしんねーぞー。つかさあ。これもうバラバラ死体だよなー。」

「レイチエルー。俺が推理小説ダメなの知ってんだろー？」

「あ、頭悪いからな。考えられないんだよな。つかレイチエルってゆーナ。」

二人は死体置き場(?)から軽快な足取りで離れるとさらに奥に進んで行った。

その時だった。

外でバリアが取れ洞窟へ進めるようになった。エルたちはびっくり仰天して副教官へ通信を打った。(ハカセが)だがみんながみんな地方へ散らばっていたため集まるのに1時間かかったというのは余談だが。

そんなことは全然知らない2人はとうとう踏み入れてしまっていた。

バンパイアの巢に。

「・・・女の子だね。レイチェル。きみよりはかわいくないね・・・  
あの目はキライだ。」

「ももとゴウは強い女の子はキライだろ？んじゃあ。ムリだと思う  
よ。付き合うのは。」

「え・・・。レイチェル」。俺さすがに吸血鬼とは付き合わないつ  
て・・・。」

その子は微笑を浮かた。年は5〜6才だろうか？レイチェルほどで  
はないけれど・・・とゴウは言うが同じぐらい綺麗な女の子だった。  
彼女はゆっくり口を開いた。

「待ってたよ・・・。悪魔ちゃん。と誰かしらあ？外にいる子達も  
一緒に来ればよかったのに。」

「怖ー。メツチャ怖ー。吸血鬼怖ー。」

「ポタン。黙って見れないの。てか、キャラじゃないよ。その怖が  
り方。」

クレスの言い分にポリウレタンはにっこり笑った。・・・うん。こ  
りや怖がってないな。

## 地球（後書き）

クレスちゃんの本名はミュージック・クレッシェンドだったりします。ゴウの本名はブロッサム・ゴウだったりします。副隊長はウィザー・ル・ジックとかいう。え？金でゴリ押ししたんじゃないかって？何でわかんno。この人は金で副隊長になったりしてます。だからへたれなんだよねー。ん？エルの出番が少ない・・・？

## マリア様

彼女は美しかった。（ええ。レイチエルよりかは・・・以下略）目は真っ黒で光ない。髪の毛は艶やかな黒髪でその上に黒く美しい羽根が居すわっており、やせ気味のほっそりとした体にはぴったりとした黒い服をまとっていた。

「悪魔ちゃんって俺の事？マリアちゃん。久しぶりだねー。」

「久しぶり。似合うと思わない？悪魔ちゃんって名前。」

「似合わないと思うよ？俺一応天使ちゃん側だからね。」

レイウッドもマリアもニコニコと今から対決するとは思えないくらい明るく喋っている。ちなみについていけないゴウは横で笑っていた。

「悪魔ちゃん。私ね。お兄ちゃんに頼まれたの。レイチエルを生け捕って来いってー。けどね。悪魔ちゃん。私。悪魔ちゃんの事さあ。」

マリアがレイウッドを見てにつこり笑ったため、レイウッドもつられて笑った。

「だあいつ嫌いだが生け捕りなんか出来ないかもーって。思ってたあ。」

笑いながらレイウッドに近づいていくマリア。引きつり笑いを浮かべたレイウッドは呟いた。

「ゴウ生け捕ってくんないかな・・・。」

「キャ

っー!!」

「死体！？気持ち悪っ！！」

「血い抜かれてる

！！吸血鬼だ。」

「うん。だから吸血鬼の巣に来たんだからねー。合って当たり前なんだよー？」

ハカセが微笑みながら泣いている女の子たちをあやす(?)



「お前は冷静だな。ちょっとは恐がれよ。」

「怖いよ？」

全員ギアギア言いながらそこを足早に通り抜けて行った。

「お友達が来たみたいだねー。悪魔ちゃん。じゃあ、そろそろ死ぬー？」

「ふん。お友達は血嫌いなんでな。来るまでは生き延びることにするサ。」

「そっか、残念。けどお友達も隊長がいたぶられてる姿みたくなーと思うなー。」

「けどな、お前。絶対隊長が死んでる姿も見たくないと思うぜー？」  
二人ともおちゃらけているがゴウもまじっで戦いの真っ最中だったりする。ちなみにレイウッドは創建でマリアは・・・え？コウモリ？血ですか。なんかいろいろ飛ばしちゃってるようです。そんなわけですから、返り血的なのを浴びてグツチョグツチョになってるわけなんです。そこに皆さんが到着して・・・。

「ぎゃあ

っ隊長が死にそうっ！！」

「血だらけだわ

っ美しいお顔が拝

めない  
っ

「だれが死ぬかあー！黙れっ。クレンとスズカか！？」

「名前覚えてくださってたの  
！？」

さて、わき役のくせに日本語おかしくなってる女子どもは置いといて確かにレイウッドは血っぽいものに囲まれて血っぽいものでぐちゃぐちなわけでした。かなりグロテスクですね。描写なんかしませんとも。

「よそ見しちゃだめだよー？悪魔ちゃん。」

「マリアちゃん。後ろの子たちには攻撃しないのー？」

「するよお。前向きにするよー。」

その途端後ろの子たちに向かって血っぽいものが降ってきた。

「エル。ヌンチャク作って。レーザー、スピード。ベラはラッパ。」

手に意識を集中させるエルと、体中から青いオーラが出て来るレーザー、そしてベラはラッパを高らかに吹いた。（ちなみにハカセは司令塔）

その音で戦いが開始された。エルは1秒で又ンチャクを出すとレーザーにほった。そしてスピードをあげたレーザーは素早く血つばいものを薙ぎ払ってゆく。ベラの弾く音は『滅』を意味するので聞こえた血つばいものは次々消えていった。

「あー。違うや。バリア張って。エル。」

エルはすつと掌に力を集めた。少し魔法の説明をすると、今エルが使っているのが一般的にいう家庭科。しかし、作るのは大気のあらゆる成分を使って作りたいものを具体化するためにちよつとばかりの魔法を使っわけだから別に何も無いところからポンツと出すわけでは無い。

バアアアアアアアアア

「フヒヨ！？どーした急に。」

目の前に突然鉄の壁が現れたためビックリしたレーザーが叫んだ。

「妥当な判断ね……。フフフ。レイウッドは10分前に張ってたわ。」

「ねー。あの人バリア張れるんだ。」

ひとまず血つばいものから逃れられてほつとした雰囲気流れる。

「ねえさー。何でバリア張ったの？」

「あのね。なんかマリアとかいう女血の蓄えがメツチャあるみたいでさ。すんごいいっぱい血つばいもの流失してたからね。こりゃこちが先に倒れるなーと。ほら。魔力にも上限って物があるからね。」

「へえー。私周り見えなかったよ。レイウッド隊長以外にバリア張ってた人いた？」

「……。周り見えなかったの？あーいたよ。いたいた。あのゴウさんのパートナーのサーシャも張ってたかな。あ、もちろんゴウさんも入ってたよ。」

「サーシャさんかあ。綺麗だし頭いいもんねー。」  
少しばかりの団欒が血つばいものの残骸の上で生まれている。奇妙な光景だ。

バリーイイイイイン

「悪魔ちゃんから開けようと思ったんだけどねえー。あんたたちのが一番破りやすそうだから来ちゃったあー。」

「悪魔ちゃんてレイウッドのこと・・・？面白い呼び方ね。吸血鬼ちゃん？」

「ふーん。綺麗な子だねー。さあて、どうやって料理しようかなあ？」

真っ先に立ち上がったベラが前に出ている間。エルはショックで頂垂れていた。あんなに頑張って張ったのに！？敗れるの絶対早いよー！！

「どうやって割ったか教えなさい！！」

エルがベラの前に躍り出たときそれが起こった。光らないはずのヴァンパイアの黒い目が青く光り、さっきまで上からだったマリアが泣き崩れた。

そして・・・エルが倒れた。

「ねえ。レーザーさんとベラさんってくっつかないかなー。」

「んー。無理。たぶん。」

「ボタン冷たい。だって、レーザーさんカッコいいよあ？それにベラさんも綺麗だし。」

クレスとボタンはまたまたボタンの部屋でこれを見ていたりしている。描写はしていないがドロドロの戦闘シーンの途中で切ってまでしてこんなおきな会話をしている。

ふーん、と呟いたポリウレタンは笑顔でクレッシェンドに近づいた。  
「レーザーさんがカッコいいねえ・・・。」

「ご……ごめん。え？あ……ポタンの方がカッコいいな。」

「うん。ベラさんよりクレスの方が綺麗だし可愛いよ。」

真っ赤になるクレス。そして今までメツチャクチャ近かったポタンの顔がさらに迫ってくる。

と、そのとき。

「ポタン兄ちゃん！！いつまでおばあちゃんのライコン占領して……っ！？」

「ロン……失せろ。こら。親の前じゃねんだから。失せろ。バーカ。」

「ごめんなさいっ！？わざとじゃないのさっ？ごごごごごめつくりiiiiiiii！！」

だ　　とつけて行ったロンをしり目に二人はキスするわけにもいかずに顔を見合わせた。ロンはなんとクレスの婚約者？許嫁的な感じなのである。親ぐるみの付き合いなのでそうなるのは仕方がないといえど……。なぜ俺じゃないっ！？と……。ポリウレタンは叫び続けている。心の中で。ええ。心の中で。付き合っているということ親に言っているわけでもなかったのが敗因である。

「なあ、断ろーとか思わないの？俺的にはさあ。親の前でラブラブなお前ら超むかつくんだけど。」

「けど……。私はポタンが一番好きだよ？」

玉碎。

## マリア様（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？はい。そうです。エルの登場がすごい少ないんです。レイウツド出づっぱりなんだよねー。

レーサーも出てないし。ハカセはキャラ濃いからまだいいんだけど。ベラ？はい出づっぱりですね。

## 記憶（前書き）

これはつきり言って本文に関係あるようでないようです。まあ、飛ばしてもかまいません。だから忙しい方は飛ばして次へどうぞ。

## 記憶

美しく揺れる花々・・・に囲まれているお兄様。

エドワード。

貴方は私の憧れの君。

そうアイツが来るまでは・・・レイチェル。いや、レイウッドというんだっけ？

私のお兄様を返してよ。

悪魔・・・。

「君がマリアちゃん？へえー可愛いね。ねえ。レイチェル。」

「うん。とっても可愛いと思う。マリアって名前も可愛いわね。よろしく。」

最初に喋ったのがミュージック・ファントムさんと次に喋ったのはミュージック・レイチェルさんだと名乗った。可愛いという二人こそ美しい顔立ちでよく似ていた。重力が5倍の星であるこの星に適応ガムなしでの訓練をしに来たという。

「・・・ありがとう。二人ともはじめまして。」

緊張しながらもおどおど喋った私に対してレイチェルさんは優しく微笑んだ。

「久しぶりだね。エドワード君。相変わらず美しい顔立ちだ。」

前にも何回か訪れたことがあるというファントムさんはお兄様に話しかけた。

「ええ。お久しぶりです。何年ぶりでしょうか。あなたはちっとも変わらない。」

「それを吸血鬼に言われるとはね。妹ちゃん、可愛くて仕方がないだろう？」

「目に入れても痛くないですよ。」

あっさりと私が可愛いことを肯定するお兄様。カッコいい。

二人の旅人が来たことによってお父様も嬉しそうだったし、お兄様もイキイキとしていた。

私も幸せだった。その日までは。

血の匂いがする。

かくわしい香り。欲しい。でもこんな昼間になんで血の匂いがするんだろう？

「お兄様の匂いもする・・・。」

私は血の匂いのする方へふらふらと近づいて行った。気づくと私はお兄様の部屋の前にいた。中は少し騒がしい。

「お兄様・・・どうしたんですか？血の匂いがあれ？お父様まで。」

「マリア。起きたんだ。あんまり見ない方がよいよ。欲しくなる。」  
けど私にはもう見えていた。首筋の周りが真っ赤に染まったレイチエルさんを抱えているファントムさんの前に立っているお兄様が・・・。

「お兄様が食べちゃったの？」

「マリア。顔が蒼くなってきたよ。ここは血の香りが充満していて気持ち悪いだろう？一緒に出よう。私たちには刺激的すぎるしね・・・。」

お父様が今まで見たこともないような真剣な顔で私の手首を引つ張った。嗚呼。逆らってはいけないんだ。いくらお兄様の血だらけで真っ赤になっている顔に光る涙を見つけたとしても・・・。

翌日。お兄様はいなかった。

「お父様ッ！！お兄様が・・・お兄様がいらないわ。香りが消えてるッ。」

「出て行ったよ。なにやらしい星を見つけたらしいぞ。んーと、桔梗だったかな。あ、地峡？だっけ。ファントム。」

「地球だよ。ケイト。あれあれ。マリアちゃん。泣いてるの？」



「お兄様・・・私に、何も言わずに、出てったのね。お兄様・・・私の、ことなんか、どうでも、よかったんだわ。お兄様は・・・私の、こと、嫌いなよ。」

喘ぎながらやつとそれだけ言うとは私は自分の部屋に走って行った。すぐにお父様が駆けつける。私の部屋には鍵がかかっているから外から優しい声が聞こえてくるのが分かる。

「マリア。エドワードは君のことをずっと気にしていたよ。けどね。私が言ったんだ。『マリアにその血濡れた体で会おうと思わないでくれ』とね。私が悪かったよマリア。」

「嘘・・・ッ！！お父様はそんなこと言わないでしょう？お兄様も私のことを気につけないわっ！！」

「・・・ばれたか。そう。お父様はそんなこと言っていない。けどエドワードは言っていたよ。『マリアのことをよろしくお願いします。父上。私にはもう会う権利はないですから。父上も。またいつか会えるといいですね。さようなら。』とね。これはホントだよ。」

私は泣けてきた。心の中で言葉が暴れる。そんなことお兄様が決めることじゃ無いのに。お兄様に会いたいよ。会いたい。会いたかったのに。私は会いたかったのよ。お兄様。

「もう一つ言っていた。『次会った時はお兄様と呼ばないでくれとマリアに伝えといてくれる？父上。次会えるとは思はないけど。もう、そんな尊敬できる吸血鬼じゃないからね。』とも。お兄ちゃんにしたらどうだ？」

オニイチャン。アナタハモウ『お兄様』ジャナイ。

「吸血鬼の性だよ。ごめんね。巻きこんじゃって。レイチエル。」  
やめて。

「まったくだ。俺はただただ修行に來ただけなのに。」

「あはは。やっぱり好きな人の血は欲しいよねー。美味しかったらしいー。」

「俺にそんな趣味はねえ。それに嘔む気か。返り討ちにしてくれる。」

「違う。お兄ちゃんはその様な人じゃないの。」

「もー。女の子の時はチヨイ可愛かったのにい。その方向の才能あるんじゃない？」

「俺はなあっ！女に格好だとさらに男に戻った時の筋力が倍増するって聞いて女になる薬飲んできたんだーっ！その趣味はねえっつうーの。」

「で、吸われたから元に戻っちゃったってわけ。」

「かな？1日あいてだしなア。わかんねえや。」

「けど、エドワードも吸い過ぎだよなエ。ファントムがいたからよかったです下手したら死んでたよあッ。それに、若干はだけてましたけど何してたんだ？僕の息子に。」

「お兄ちゃんをどうするのよ。あとから悪口いうなんて。」

「された方だつーの。てか、あんなア。俺たちはふつーに会話してたんだぞ？昼間だし。なのにさあ。人が親切心でお茶を入れたる思っで背え向けてたら後ろからガブリでさ。いったいもんだから振り払おうと思っで動いた余計拘束されて脱がされそうになった時ファントムが入っできてくれて。血は吸われるわやられそうになるわで最悪だよ。」

「もうやめてよ。」

「やらしい会話してたんじゃないのー。」

「するかッ！こっちは男だぞ。なんか政治の話してたよ。」  
「騙したのはそっちじゃない。」

「いやいや、まあお蔭でやっとP T Tに参加してくれたしさあ。ありがとーね。レイチエル。」

「レイウッドだッ。P T T？なんじゃそりゃ？」

「んーと『プロジェクト・食べて食べさせる』P T Tだよ。」

「意味わかんねえ。あのさあ。エドワードに会ったらよ、俺は怒ってないから。騙してごめんな。って言っといてくれないか？」

「頑張る。」

レイチエルと騙っていたのに。レイチエルなのに。男の声でお兄ちゃんに喋らないで。

「レイチエルさん、ってこれからも呼んでいいですか。兄の代わりに。」

「え……。ま、まあいいけど。マリアちゃんは辛くない？」

なんでそんな。なんでそんなことを。なんで分かつちゃうのよ。なんで一番分かつて欲しくない相手が一番最初に分かつちゃうの。

「マリア。エドワードは別にレイウッドを恨んでないぞ。もう好きでもないだろう。」

「けど、レイチエルさんと呼ばして下さい。兄もそう呼びたいと思うんです。」

お父様は分かっている。私はお兄ちゃんが好きなんだからしょうがない。けど辛い。悪魔、と呼び去ってやりたいのに。レイチエルさんなどというお兄ちゃんが一番呼びたいであろう呼称を口に出すなんて。

「マリア。」

「エル。」

「あなたも大変だったのね」

二人の声が重なり二人には同時に笑みがこぼれた。

## 記憶（後書き）

マリアちゃんの記憶でした。なんで急にマリアの記憶を書いたかというトレイウッド扮するレイチエルさんが書きたかったからです。まあ、出番少なかったですけど。マリアちゃんはこの時20歳程度です。姿は2歳だけでも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9646y/>

---

エルおばあちゃん達

2012年1月13日22時58分発行